

第9回国際肝癌学会(ILCA)

工藤 正俊 近畿大学医学部消化器内科学教授

第9回国際肝癌学会(ILCA)は2015年9月4日から6日までの間、パリのMarriott Rive Gauche Hotel & Conference Centerで開催された。前日に開催されたpre-meetingにおいては今非常なホットな話題である肝細胞癌のImmunotherapyに関するセッションが12時から18時40分までたっぷり半日かけて議論がなされた。

前半は何故、腫瘍が免疫逃避を起こすのかというpathophysiologyについての講演が並んだ。特に肝細胞癌の免疫微小環境がきわめて重要であるといったことが発表された。後半の部はまさしくImmunotherapyについての講演であり、すでに2013年に発表されていたCTLA-4抗体による治療やPD-1/PD-L1抗体による新しい治療などさまざまな免疫チェックポイント阻害薬、あるいはそれ以外のImmunotherapyの最新動向について、積極的な討

議が行われ筆者も非常に勉強になった。

初日の4日にはILCA symposiumとして比較的基礎的な内容で議論が行われ、“Emerging Concepts for Understanding Liver Cancer”というセッションでmolecular classificationについての話題が中心であった。特に日本から坂元亨宇先生の講演、“Integrated molecular-morphological classification of HCC”がきわめて印象深かった。また、State-of-the-Art Lecture 1としてGut-liver axisのタイトルで腸内細菌と肝細胞癌の関係についてProf. Robert Schwabeが講演を行った。ILCA Symposiumにては“Pros and Cons Session”で肝切除がwithin or beyond the guidelineという内容で國土典宏先生が日本の立場からきわめて明快な講演を行った。また、Prof. Jordi BruixがBCLCはあくまでgold standardであるという主張を行い、これに対し



写真1. ILCAの会場の入り口で近畿大学の医局員とともに記念撮影



写真2. メイン会場は参加者で埋め尽くされている